様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４３６０２５３

研究課題名（和文）都心再生に向けた回遊型実証社会実験による都市計画マネジメント手法の構築

研究課題名（英文）City Planning Management through Social Experiment: Rambling Activities for Urban Regeneration

研究代表者
嘉名　光市（Kana, Koichi）

大阪市立大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号：７０３８１９７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　14,400,000円

研究成果の概要（和文）：(1)回遊型社会実験データベース：海外8都市、国内4都市のインタビュー、現地調査を参考に回遊型社会実験データベースを構築し、社会実験は「交通」「空間」「イベント」に分けられることを明らかにした。また、全国の常設的オープンカフェ事業の展開の特徴、富山市グランドプラザの利用目的を明らかにした。
(2)実証社会実験：都心エッジ型、既成市街地型の社会実験を実施し、橋上カフェ社会実験の評価と回遊行動に与える影響を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：(1) Database for a Social Experiment with Rambling Activities: We constructed a database for a social experiment with rambling activities through research in eight cities overseas and four domestic cities. We found that social experiments were classified by “Transportation,” “Public Space,” and “Event.” Through analysis of city size, we revealed that “open-cafe;” initiatives need a large sized city, but “Marche,” “town-walking events,” and the “Machinaka Bar” can be organized in some small cities.

(2) Social Experiment: We conducted social experiments at both downtown and waterfront locations. We evaluated the influence on rambling activities of the “Kitashinchi Garden Bridge Cafe;” social experiment, an example of the bridge type experiment. We understood that a key issue is the relationship between the safety of visitors and selling alcoholic drinks. We found that that the open-cafe; on the bridge became a tool for improving rambling activities.

研究分野：都市計画

キーワード：都市計画　都市・地域計画　回遊　実証社会実験　都市計画マネジメント

１．研究開始当初の背景

(1)都心既成市街地の再生に向けて残されている課題

近年、都市再生にむけた都市計画の応答は重要であり、都市再生特別措置法をはじめ一連の応答がなされ、大規模な都市再開発における容積率コントロールやエリア・マネジメント手法の導入など一定の成果は生まれている。しかし、都心既成市街地、すなわち規制の錯綜する都心ウォーターフロントの都心エッジや大規模再開発が困難な既成市街地などではその再生の処方箋は不透明である。

ウォーターフロントなどの都心エッジでは、①河川、公園、港湾、都市計画、道路、橋梁等管理や規制が錯綜し、効果的利用がままならない点、②土地利用転換等の将来ビジョンが不透明で、都市像・空間像が描けない点、③前述の問題を柔軟・迅速に調整できる方法・主体が不在な点などがある。

既成市街地においては、①スクラップ＆ビルド型の再開発が困難でそれを代替する効果的手法がない点、②地域の歴史・文化等の資源や公開空地などのオープンスペースを有しながらも活用できていない点、③地域コミュニティが崩壊しており、まちづくりの推進主体の再構築が必要な点などがある。

(2)オープンスペースを活用した社会実験への着眼

衰退する地域の賦活策を摸索し、地域ポテンシャルを発現させる手法として、オープンスペースなど既存の空間資源の活用方策を試行する社会実験がある。道路空間機能の再配分、交通体系の見直し、公園・河川空間の賑わい利用、公開空地のオープンカフェ利用等、占用・利用等に関わる規制を緩和し、賑わいを生み出し、その実験成果を活かして制度設計や都市デザイン等に反映するこの方法は、次代の都市像を描出する有効な手法といえる。また、近年特に注目されるのは、単一空間の活用を目的にした社会実験から、複数の空間での社会実験を組み合わせて、まち全体の回遊性や都市構造を組み替えようとするような大規模な社会実験が見られるようになってきた点である。

しかし、回遊型社会実験は各地での導入が断片的には把握されているものの、事例の体系的収集やその分析、実験を踏まえた都市計画等の具体的応答策等の詳細については十分明らかになっていない。

２．研究の目的

本研究は、オープンスペースを活用した回遊型社会実験手法に着目し、その国内外事例調査を体系的に実施したうえで、その分析を行い、都市計画マネジメント計画手法の実現にむけた課題（空間活用手法・実態把握手法・検証方策、効果的マネジメントに向けた制度・仕組み・主体等）を明らかにする。そして、有効な再生策が確立されていない都心既成市街地において実証実験を実施し、その検証・改善・発展サイクルを通じた仮説検証を実施し、実効性ある手法を結論として得る。また、そのプロセスとして、国内外の実務担当者、研究者らによる研究プラットフォームを構築し、創発的成果を生み出すコミュニケーションと研究成果を広く還元する。

３．研究の方法

本研究は回遊型社会実験データベースの構築とその分析、回遊型実証社会実験の実践を柱に展開する。

回遊型社会実験データベースの構築にあたっては、国内外の事例について体系的に調査したうえで、誰もがアクセス可能とする。その際オープンな研究プラットフォームを組成し、随時情報を蓄積させながら共有し、開放的な研究の場を確立し、単なる事例収集に留まらず対話しつつ創発的に発展する計画支援モデルの構築を図る。

回遊型実証社会実験では、大阪都心等を対象に、国内外事例調査および前述研究プラットフォームにおける議論の蓄積を踏まえた仮説的実証サイクルによって、応用研究を実施する。実証実験にあたっては、行政、まちづくり団体等による実証実験プラットフォームを構成し、回遊型社会実験を内包した実践的な都市計画マネジメント手法の構築をはかる。

４．研究成果

(1)回遊型社会実験データベース

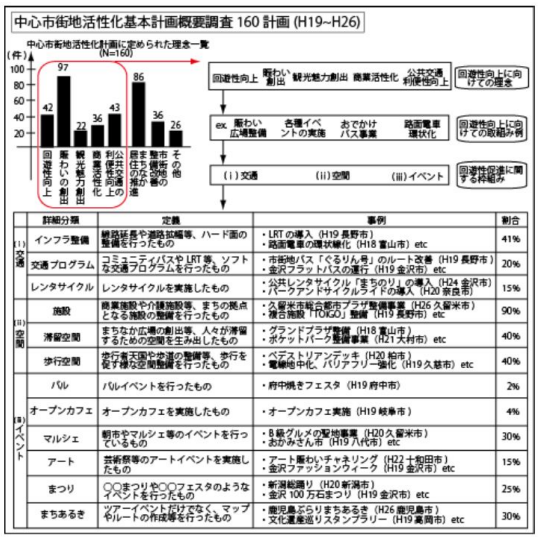
①国内外の事例調査

海外調査について、平成 24 年度はニューヨーク（Bryant Park Corporation, Lower East Side, Project for Public Spaces）、サンアントニオ（City of San Antonio 等）の 2 都市を調査し、平成 25 年度はロンドン（Open House London）、パリ（Paris Plages）、バルセロナ（バルセロナショッピングライン等）の 3 都市、平成 26 年度はイスタンブール（市役所）、フェズ（The Agency for the Development and Rehabilitation of the Medina of Fez）、セビージャ（la Confederación Hidrográfica del Guadalquivir 等）、シンガポール（国家開発省 土地利用計画機関 都市再開発庁）の 4 都市におけるインタビュー、現地調査を実施した。

国内調査については、平成 25 年度に旭川市（旭川買物公園）、富山市（(株）まちづくり富山による中心市街地の再編）、福岡市（We Love 天神によるエリアマネジメントの取り組み）への現地調査を実施した。平成 26 年度には姫路市（姫路駅北駅前広場等）への現地調査を実施した。

②回遊型社会実験データベースによる特徴分析

これらの国内外の事例調査の取り組みを参考にしつつ、国内の多様な回遊型社会実験データベースにより事例の傾向を明らかにし



	詳細分類	定義	事例	割合
(i)交通	インフラ整備	鉄路延長や道路拡幅等、ハード面の整備を行ったもの	・LRT の導入（H19 長野市） ・路面電車の環状線化（H18 富山市）etc	41%
	交通プログラム	コミュニティバスや LRT 等、ソフト面交通プログラムを行ったもの	・市街地バス「くるりん号」のルート改善（H19 長野市） ・金沢フラットバスの運行（H19 金沢市）etc	20%
	レンタサイクル	レンタサイクルを実施したもの	・公共レンタサイクル「まちのりん」の導入（H24 金沢市） ・パークアンドサイクルライドの導入（H20 奈良市）	15%
(ii)空間	施設	商業施設や介護施設等、まちの拠点となる施設の整備を行ったもの	・久留米市総合都市プラザ整備事業（H26 久留米市） ・複合施設「TOGO」整備（H19 長野市）etc	90%
	滞留空間	まちなか広場の創出等、人々が滞留するための空間を生み出したもの	・グランドプラザ整備（H18 富山市） ・ポケットパーク整備事業（H21 大村市）etc	40%
	歩行空間	歩行者天国や歩道の整備等、歩行を促す様な空間整備を行ったもの	・ペデストリアンデッキ（H20 船橋市） ・電線地中化、バリアフリー強化（H19 久慈市）etc	40%
(iii)イベント	バル	バルイベントを行ったもの	・府中焼きフェスタ（H19 府中市）	2%
	オープンカフェ	オープンカフェを実施したもの	・オープンカフェ実施（H19 岐阜市）	4%
	マルシェ	朝市やマルシェ等のイベントを行っているもの	・8 級グルメの聖地事業（H20 久留米市） ・おかみさん市（H19 八代市）etc	30%
	アート	芸術祭等のアートイベントを実施したもの	・アート賑わいチャネリング（H22 十和田市） ・金沢ファッションウィーク（H19 金沢市）etc	15%
	まつり	○○まつりや○○フェスタのようなイベントを行ったもの	・新潟総踊り（H20 新潟市） ・金沢 100 万石まつり（H19 金沢市）etc	25%
	まちあるき	ツアーイベント向けでなく、マップやルートの作成等を行うもの	・鹿児島ぶらりまちあるき（H26 鹿児島市） ・文化遺産巡りスタンプラリー（H19 高岡市）etc	30%

図 1　回遊型社会実験を捉える枠組み

表 1　イベント種類と都市規模の関係

都市規模	群	①政令指定都市	②中核市	③特別区	④左記以外	都市規模間の特徴
マルシェ	α群	該当なし	α－B－Ⅲ(1)	α－A－Ⅱ(1)	α－A－Ⅰ(1)	短期狭域型（α－A）
	β群		β－A－Ⅱ(1)		β－A－Ⅱ(2) β－A－Ⅲ(2)	中期狭域型（β－A）
	θ群		θ－C－Ⅲ(1)			
まつり	α群	α－A－Ⅰ(5) α－B－Ⅱ(1)	該当なし	該当なし	α－A－Ⅰ(3)	短期狭域型（α－A）
まちあるき	α群			α－A－Ⅰ(1)		
	γ群	γ－A－Ⅰ(1)	γ－A－Ⅰ(1)			長期狭域型（γ－A）
	θ群	θ－A－Ⅰ(2) θ－B－Ⅰ(1)	θ－A－Ⅰ(1)		θ－A－Ⅰ(3)	常時狭域型（θ－A）
オープンカフェ	γ群	γ－A－Ⅰ(1)	該当なし	γ－A－Ⅰ(1)	該当なし	長期狭域型（γ－A）
	θ群	θ－A－Ⅰ(3)				
バル	α群		α－B－Ⅱ(3)	該当なし	α－A－Ⅱ(3)	
		α－C－Ⅱ(1)	α－C－Ⅱ(1)		α－C－Ⅱ(1)	短期広域型（α－C）
アート	α群 β群		β－A－Ⅲ(1)	α－A－Ⅰ(1)	該当なし	
	γ群	γ－A－Ⅰ(3) γ－B－Ⅰ(1) γ－C－Ⅰ(1)				
イベント間の特徴		長期狭域型（γ－A） 常時狭域型（θ－A）	短期中域型（α－B） 中期狭域型（β－A）	短期狭域型（α－A）	短期狭域型（α－A） 中期狭域型（β－A）	

た。
具体的には回遊型促進に向けた社会実験は「交通」「空間」「イベント」に分けられ、「イベント」はマルシェ、まちあるき、オープンカフェ、バル、アートの 6 つに分類できることを明らかにした。さらに、イベントの開催期間、面積、拠点数毎の特徴を明らかにした。都市規模で分析した結果、オープンカフェは政令市もしくは特別区のみでの開催されており、ある程度の都市規模が必要であるといえるが、マルシェ、まちあるき、バルなどでは小規模でも実施可能であることを明らかにした。上記の成果を 2015 年度日本都市計画学会関西支部第 13 回研究発表会で公表した。

③全国の常設的オープンカフェ事業の特徴

全国の常設的オープンカフェ事業 7 事例の特徴と各事例の空間的条件と運営体制を行政と事業者の視点から分析し、常設的オープンカフェの継続実施条件を明らかにした。
具体的には、常設的オープンカフェの展開は、事業の位置づけが常設化の実現によって多様化していることが明らかになった。地区の賑わい創出に加えて、周辺地域の回遊性向上を図る事例（大阪、高崎、広島（京橋川地区））、エリアマネジメントの一環として実施されている事例（大阪、札幌）、地区の治安向上（新宿、広島（京橋川地区））を期待する事例などがある。これらの事例の位置づけが、

図 2　常設的オープンカフェ事業（大阪市）

常設化の実現によって多様化しているといえ、また多くの事例の課題としては、寒冷期の気候的対策があげられた。そして、常設的オープンカフェ事業の継続実施条件として、オープンカフェの綿密な配置計画と維持管理ルールの緩和措置の必要性が明らかになった。上記の成果を Korea Planning Association・2015 International Symposium on Urban Planning Asia-Pacific Planning Conference（ISUP）にて発表した。

④富山市グランドプラザの利用目的

まちなか広場の先進事例である富山市グランドプラザにおけるインタビュー調査より、グランドプラザの利用の目的とその利用の前後の活動を明らかにした。
グランドプラザの利用は主目的利用（35%）と副次的利用（65%）に分けられ、主目的利用では広場自体を 1 日の活動の中で目的の一つとして利用するがグランドプラザのみが目的になることは少なく（全体のうち

図 3　富山市グランドプラザ

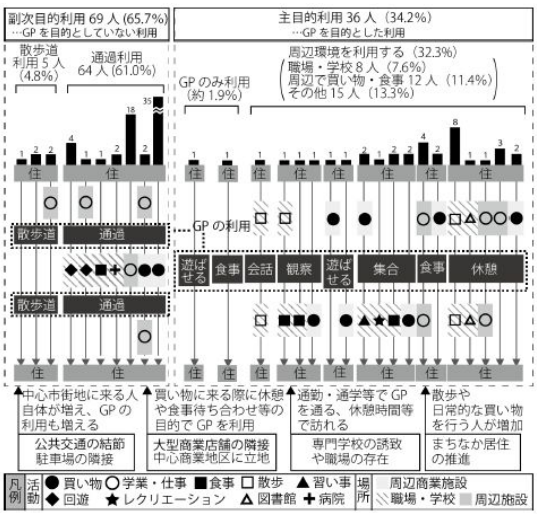


図 4　グランドプラザの利用目的と前後の活動

図 5　橋上カフェ社会実験

1.9%)、周辺環境を目的として中心市街地を訪れた際の一つの活動の場所となっていることが分かった。また、副次的利用では通過利用が主で全体の 60%を占めており、これも周辺環境を目的としておこる利用であった。グランドプラザの賑わいは周辺環境を目的とした日常的活動においての舞台となることによって生まれていた。周辺の空間構成からグランドプラザを利用する主体や目的にも影響していることが分かった。

⑵実証社会実験
都心エッジ型として水辺周辺市街地との一体的な回遊を実現する水都大阪等の社会実験を実施した。既成市街地型として公開空地、広場等の対象地を拡大させ、船場博覧会等の活用実験を実施した。水都大阪の取り組みは図書にまとめ研究成果として公開するとともに、市民向け講座にて発表した。
①橋上カフェ社会実験の評価と回遊行動に与える影響
特に大阪で取り組まれた橋上のオープンカフェ社会実験「北新地ガーデンブリッジカフェ」の取り組みについて、以下の 3 点を明らかにした。
・橋上カフェの恒常化に向けた課題：アルコール類の販売や魅力向上イベントと安全性の確保
・橋上カフェが歩行者の回遊行動に与える影響：通りがかりの人の通行が多く集客性が期待できる。回遊速度の低下、目的のない属性の増加などから橋上カフェを中心とした空間においてゆったりとした人の流れを生み出している。
・利用者から見た橋上カフェの評価：店舗数、飲食内容の評価が低い一方でくつろげる静かな空間とも評価できる。若い世代、よく通る人、カップルで冬・夜でも営業希望が高い。これらから橋上カフェは都市のにぎわい創出のツールの一つといえることを明らかにした。また、以上の成果を ISUP にて発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

① 三好章太・<u>嘉名光市</u>・<u>佐久間康富</u>：神戸市「緊急避難サポート事業」の取り組みと特徴、日本建築学会技術報告集、22-50 号、pp.303-308、査読あり、2015 年 10 月
② 山本琢人・<u>嘉名光市</u>・<u>佐久間康富</u>：低層部が形成する街路景観の印象評価に関する研究、日本建築学会計画系論文集、709 号、pp.661-668、査読あり、2015 年 3 月
③ <u>嘉名光市</u>：都市再生手法としてのエリアマネジメント－BID の導入による都市計画再構築への展望、日本建築協会・建築と社会、95-1102、pp.8-11、査読なし、2014 年
④ 増井徹・高岡伸一・<u>嘉名光市</u>・<u>佐久間康富</u>：大阪駅前市街地改造事業における一連の計画過程にみる空間像の変容について、都市計画論文集、日本都市計画学会、48-2 号、pp.129-134、査読あり、2013 年 10 月

〔学会発表〕（計　４件）

① 三好章太・<u>嘉名光市</u>・<u>佐久間康富</u>：密集市街地の二方向避難路確保事業に関する研究 ： 全国 4 自治体の事業を対象として、2015 年日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.251-252、2015 年 9 月 4 日、東海大学（神奈川県・平塚市）
② <u>Koichi Kana</u>, Kazuki Takahara, <u>Yasutomi Sakuma</u> : A Study on Evaluation for the Social Experiment of Open-air Café on the Bridge and Effects for the Strolling Activity in the City - A case of ''social experiment of Kitashinchi garden bridge café'' in Osaka City -, Korea Planning Association ・ 2015 International Symposium on Urban Planning Asia-Pacific Planning Conference -Proceeding-、2015 年 8 月 21 日、Sejong City（Korea）
③ Takuto Yamamoto, <u>Koichi Kana</u> and <u>Yasutomi Sakuma</u> : Study on the Actual Conditions and Issues of Open-cafe in Public Space -Case Study of the 7 Cities in Japan-, Korea Planning Association ・ 2015 International Symposium on Urban Planning Asia-Pacific Planning Conference -Proceeding-、2015 年 8 月 21 日、Sejong City （Korea）
④ 長谷川昂輝・加畑文裕・河原知樹・出口智也・寺口毅・西村亮介・<u>嘉名光市</u>・<u>佐久間康富</u>：回遊性促進型イベントの傾向に関する研究　－定量的指標による分析を通して－、日本都市計画学会関西支部第１３回研究発表会講演概要集、pp.73-76、2015 年 7 月 18 日、大阪市立大学文化交流センター（大阪府・大阪市）

〔図書〕（計　6件）

① 橋爪紳也・光のまちづくり推進委員会、『光のまちをつくる:水都大阪の実践』、創元社、2015年、pp.130-146
② 泉英明・嘉名光市・武田重昭、『都市を変える水辺アクション:実践ガイド』、学芸出版社、2015年、pp.64-73、pp.90-97、pp.98-105、pp.134-143、pp.145-152、pp.179-189
③ 高岡伸一、倉方俊輔、嘉名光市、橋爪紳也、『生きた建築 大阪』、140B、2015年、pp.54-57、pp.130-133、pp.183-189
④ 嘉名光市ほか『コンパクト建築設計資料修正　都市再生』、丸善・日本建築学会、2014年、pp.146、pp.150-151、pp.186-187、pp.202-203
⑤ 嘉名光市ほか『景観再考　景観からのゆたかな人間環境づくり宣言』、鹿島出版会、2013年、pp.111-118
⑥ 嘉名光市、Civic Pride in Aqua Metropolis Osaka、『Asia Pacific Institute of Research Kansai in the Asia Pacific Toward a New Growth Paradigm』、Asia Pacific Institute of Research、2013年、pp.126-138

６．研究組織

(1)研究代表者

嘉名　光市（KANA, Koichi）
大阪市立大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：70381978

(2)研究分担者

佐久間　康富（SAKUMA, Yasutomi）
大阪市立大学・大学院工学研究科・講師
研究者番号：30367023

堀　裕典（HORI, Hirofumi）
大阪市立大学・都市研究プラザ・特任講師
研究者番号：00614653